石碑

このあたりの仏石と墓標は、昭和の大修理（1956-1964）の際に石垣から発掘されて、ここに設置された。この形に建てられたかやどこの寺や墓地から運ばれたものかは、記録がないのでわからない。わかっていることは、後の姫路城の元となる称名寺という寺が 1143 年にこの丘にあったということだ。この地方の豪族も檀家であったことから、石のなかには彼らや一族を供養するための墓標もあるかと思われる。現在でも移転した正明寺から住職を年に数回招き、供養を営んでいる。

五輪塔の前にある石燈籠は 1990 年に東京から移築された。1749 年から 1868 年まで城主であった酒井家の墓前に祀られていたものである。灯籠は姫路城の最後の藩主であった酒井忠邦公（1854-1879）を偲んで建てられた。忠邦公は彼の前任の藩主が明治新政府（1868-1912）によってその地位を追われた後、10 代で城主となった。1871 年の廃藩置県で生まれ故郷の東京に戻った。慶応大学に入学したのち、アメリカに留学したが帰国後に病気となり、25 歳で亡くなった。ここはかつて、南から西にかけて土塀で囲まれ、東に門番所があった地域である。このあたりの石垣は姫路城内で最も古くからあると思われる石垣である。1580 年代頃、武将豊臣秀吉（1537-1598）がこの城を引き継ぎ、もともとあった木造城郭を拡張したと信じられている。昭和の大修理により、城の他の部分へのアクセスが容易になる前は、街を見渡す人気のスポットだった。城の外側で最高の景色を眺めることができる場所であったかもしれない。